東京純心女子大学　第19号（2015）pp.1～22

方定煥と天道教 ―― 孫秉煕の三女との結婚まで
～評伝『小波・方定煥の生涯 ―― 愛の贈り物』を読む～
A Study of Bang, Jeong-Hwan and Chondogyo

大　竹　聖　美

Bang, Jeong-Hwan's marriage was a turning point in his life. He married a daughter of the leader of a religious group that had a great influence on modern Korea. He lived with leaders of religious groups and learned the faith. This fact is important to understand the concept of the children's cultural movement that he would go on to lead.

1. はじめに

韓国における近代児童文学の開拓者で、先駆的人権運動家として知られる小波（ソパ）・方定煥（パン・ジョンファン、1899年11月9日～1931年7月23日）は、韓国の近代史を考察する上で最重要人物の一人として挙げることができるだろう。

現代韓国の児童文学作品が多数紹介されるようになった今日においても、日本ではその人物はあまり知られていないが、韓国においては、「韓国児童文学の父」あるいは「韓国の子どもたちの父」として児童文学者ばかりでなく、一般国民さらに子どもたちからも敬愛されている人物である。特に5月5日のオリニナル（子どもの日）を創設した彼の業績は広く知られ、今日も国民の祝日として祝われながら方定煥の存在は繰り返し語り継がれている。ソウル市内のオリニ（子ども）大公園には大きな銅像[i]が立っているし、子ども向け偉人伝記全集では定番で、児童文学・児童文化の運動家でありながら民族の英雄でもある点で、韓国のアンデルセンやグリムといっても過言ではない。

本稿では、韓国で出版された方定煥に関する最も信頼できる研究書である李相琴の『小波・方定煥の生涯 ―― 愛の贈り物』（ソウル：ハンリム出版社、2005）（이상금『소파 방정환의 생애－사랑의 선물』한림출판사）から、方定煥の人生において最も重要な転機となった彼の結婚に関して訳出し、精読する。なお、方定煥の幼少期に関しては、拙稿「方定煥研究～誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景：評伝『小波・方定煥の生涯 ―― 愛の贈り物』を読む～」（東京純心女子大学『紀要』第18号、2014年3月）がある。

2. 善隣商業学校入学―― 1913年（13歳）

方定煥は、1905年に新設されたばかりの私立普成小学校に入学している。韓国では「教育救国主義私立学校運動」として近代教育史に記される民族自立を掲げる愛国啓蒙運動があったが、方定煥が入学した普成小学校はまさにその代表的名門私立学校である。しかし、日露戦争に勝利した日本の勢力の膨張とともに朝鮮王室は没落し、王室御用達商家であった方定煥の家も没落し、普成小学校は2～3年で通えなくなってしまった。

その後、1909年にメドン普通学校に入学し直し、さらに翌1910年にはミドン普通学校に移り、1913年にそこを卒業している。当時の朝鮮の学制では現在の小学校（韓国では初等学校）に該当する学校として朝鮮語を話す子どもたちのための「普通学校」が存在し、それは四

年制であった。これに対して朝鮮在住の日本人子弟が通った学校は日本国内と同じ六年制だったのだから、差別政策といわれる所以の一つがここにあった。

その後、方定煥は父親の勧めで善隣商業学校に入学する。この学校は、1899年に大倉財閥の大倉喜八郎が設立した財団法人の学校で、官立商工学校、官立農商工学校など幾度かの名称変更の後、1907年に善隣商業学校として開校している。方定煥が入学した1913年は、当時の京城府青葉町3丁目（現在のソウル市龍山区）に校地を移転させた年で、同年、建築家の中村與資平が設計した講堂も竣工されている。地上二階建て延べ床面積約660坪の木造レンガ造りの講堂は現在もほぼそのまま現存している。また、善隣商業学校は古賀政男の母校としても知られている。彼がマンドリンを初めて手にしたのはこの善隣商業学校時代だったといわれ、古賀政男が思春期を朝鮮で過ごしたことと、その後の古賀メロディーの形成についてもその因果関係がたびたび指摘されている。[ii]

ところで、方定煥は、1913年にこの善隣商業学校に入学したのであるが、卒業まで一年を残して中退してしまった。王宮の前で代々大きな商いをしてきた家の跡取りとして生まれた方定煥だったので、父親や家のものは家業を継ぐのを当然と考えていただろうから彼の商業学校中退は大きな衝撃だったであろう。王宮の没落と共に家業が破たんしたにもかかわらず一人息子の方定煥を商業学校に進学させたのも、代々続いた家業の復興を期待していたからに違いない。このあたりの事情について、李相琴[iii]は次のように指摘している。

> 父親の期待を裏切り商業学校を辞めたのは、ますます苦しくなる家の状態も現実的な理由だったが、何よりその学校の勉強が嫌いだったからだ。商業簿記と珠盤が主要科目だった勉強は方定煥には耐えがたいものだった。最近の言葉で表現するならば、とうてい適性に合わなかったためである。卒業さえすれば金融機関に就職が保障されるという商業学校を、彼は未練もなく辞めてしまった。
>
> では、方定煥は何になろうと思っていたのか。彼は幼いころから格別な素質を持っていた。彼の素質は、簡単にいうと、理系ではなく文系であり、芸術家としての素質に恵まれていた。彼は夜珠峴のいたずらっ子の頃から母親の鏡台の周りに布団を重ね、演劇遊びをしていた。後日方定煥は、演劇に関心を持って脚本を書き、主演と演出もして演劇雑誌も刊行するようになる。そして何より、彼は人が好きだったし、ガキ大将の頃からたくさんの子どもたちを集めた。彼が生涯を通じて、少年団を作り指導者を育成することに主導的役割を果たしたのは偶然ではなかった。方定煥はすでに10歳（満8歳）の時、「少年立志会」を作ったというのだから、まったく早熟な少年だった。
> （李相琴『小波・方定煥の生涯 ―― 愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、41～42頁）[iv]

王宮が崩壊し、日本の統治が始まり時代は激変のさなかにあったといえども、伝統的な儒教の価値観が浸透していた朝鮮社会の中で、学歴を捨て親の期待に背くのはよほどの決意が必要だったはずである。李相琴は、この一大決心を下した方定煥の素質や個性について次のように述べている。

> 方定煥は幼い時からたいへん器用で絵をよく描いたという。ある画家が方定煥が英敏で素質があるのに家が落ち着かず、素質を発揮できないから、自分が養子にしようと申し出たという。しかし方定煥は一人息子だったので不成立となったと伝えられている。どこでどんな縁で画家に出会ったのかは分からない。ただし後に懇意な友人と

して交際するようになった柳光烈[v]の記録（1973年1月「方定煥」『月刊中央』）に、高羲東[vi]に西洋画を習ったことがあるとある。具体的な名が出てくるのはこの記録だけなので、方定煥に直接聞いた可能性が大きい。

高羲東は韓国の西洋画家第一号で、後に東洋画に転向した大家だ。彼は父親が色々な地域の郡守を歴任した官吏一族で、1886年に生まれた。かつて開化思想に目を開いた父親の影響で絵の勉強をした人だ。1909年2月に東京美術学校に最初の韓国人留学生として入学し、五年間学んだというから、方定煥と出会ったのはそれ以前であろう。その時、高羲東は二十二、三才ぐらいにしかならなかったので、養子うんぬんは弟子としたいという話が大袈裟に伝わったのではないかと思う。しかしこれはありふれた話ではない。韓国の美術界の先覚者であり大家である春谷・高羲東が方定煥の素質を認めたという事実ではないか。（李相琴、43 〜 44頁）[vii]

また、のちに口演童話の名手として著名になった方定煥の生来の素質を示すものとして幻灯機を回したエピソードが語り伝えられているが、これに関して李相琴は次のように指摘している。

方定煥の手先の器用さは特出していたということだ。この画家（訳者注：高羲東）が方定煥に幻灯機を贈り物として与えた。その機械に絵葉書やどんな絵でもつければ鮮明な天然色の絵が壁や幕に鮮やかに映るのだ。当時としては魔術のような機械だったはずだ。資料を探してみると幻灯機はその当時日本で大流行した教育機材でありおもちゃだった。小型幻灯機械五十銭、絵の版一枚につき二銭から五銭だったので、一ウォンほどあれば機械と絵の版二ダース程度は買うことができた。（金田茂郎『子どもの文化史』（大月書店、1975年）参照）

それにしても、一ウォンもする贈り物をするということはすごいことだった。方定煥は幻灯機に映し出された絵を説明しようと弁士の役割をした。持って生まれた言葉の巧みさに、子どもたちだけでなく大人たちも我を忘れた。大叔母の家の広い床と広場まで取り巻く野次馬たちがその家の甕を割ったこともあった。彼の言葉の巧みさは当然のことながら随一の特性であった。韓国一番の口演童話家に成長する兆しはすでに幼いころから現れていたのである。方定煥を知っている人たちが異口同音に感心するのがまさに童話を話す天才的な素質だ。彼は持って生まれたストーリーテラーだった。

少年立志会、幻灯機の話は、大部分の児童書の伝記におもしろく再構成されて載っている。彼の才覚があって滑稽で茶目っ気あるエピソードは、読む人々を楽しませる。

しかし、「大樹となる木は双葉から違う」というが、私たちが驚かざるを得ない双葉の特性は、幼い方定煥の才能ではなく、彼の意志の力と言わなければならないだろう。様々なエピソードはおもしろおかしく描かれるが、実状では、その頃の方定煥は腹を空かせて苦労していたのである。弁当がなく、昼休みになれば手洗いの後に隠れていた少年であり、寒さに足踏みしながら水を汲んだ少年だ。それにもかかわらず、彼は明るく明朗に逆境を前向きに克服する勇気ある少年だった。（李相琴、44 〜 45頁）[viii]

これらはすべて、方定煥がのちに口演童話の名手として活躍し、朝鮮の児童文化運動の発起人となったその素地を語ったものである。方定煥がのちにその「オリニ（こども）運動」を始めた理由やきっかけはまた別にあるのだろうが、しかし、その生まれながらの気質や幼少時の性向についてのエピソードを顧みると、すでに将

来の活動が予見できるのであった。

3. 朝鮮総督府土地調査局「写字生」時代 ──1915年（15歳）

商業学校での学業が適性に合わなかったからなのか、善隣商業学校を中退した方定煥は1915年15歳で、初めて働き口を得た。それは、朝鮮総督府土地調査局で帳簿を書き写す「写字生」の仕事だった。

> 善隣商業学校をやめた方定煥は、家でぶらぶらしていることもできず、かといって働き口があったわけでもない。1915年、彼が満で15歳という年齢で得た初の働き口は、朝鮮総督府土地調査局で帳簿を書き写す「写字生」だった。一日中文字を書く代価は二十銭、休みの日をのぞけば一ヶ月に五ウォンになるかならないか程度の収入だった。
>
> 土地調査局とは何をする所なのか。韓日合邦（韓国併合）以後、朝鮮総督府が全国の土地を測量して所有主を明らかにし、現代的な土地制度を展開するという口実で大々的な調査作業を始める。本格的な収奪の開始だった。1912年から1918年まで続いたこの調査で、わが国の農民たちは先祖代々受け継いできた農作業の根拠地を大部分失った。申告されない土地はどんどん国家所有として剥奪した。「民田」といって、一族や部落で共同所有した土地は当初所有者が曖昧だったし、のみならず新しい申告手続きもなじみがうすかった。また総督府に対する反抗意識もうまれ、大部分の農家で申告はうまくなされなかった。その結果、所有主が変更されたという通知書一枚で農民たちは追い出されることになったのだ。1930年の統計では、全国の田畑と林野を合わせて国土の40%が国家所有に転換されてしまった。かくして、無力でかわいそうな農民たちだけが風呂敷包みを背負って北間島、あるいは日本の労働市場にぞろぞろと流れていくことになった。
>
> 当時土地調査局は作業を急ぐために光化門と貞洞に大きな事務室を用意して、一万人以上の臨時書記を採用していた。方定煥が仕事をしたところがまさにここである。一日中、土地台帳を記録するのだった。本意ではなく、その時は内幕をよく知らなかったにしても、日本の収奪を手伝ったわけである。何とも皮肉な運命であった。（李相琴、46～47頁）[ix]

現在、いわゆる民族運動のリーダーとして尊敬されている方定煥が、その実情を知らずに関わった末端の仕事だったとはいえ、現在では土地収奪事業との悪名高い朝鮮総督府による土地調査局に関係していたというのは確かに皮肉なことである。

しかし、弱冠15歳の少年である。しかも親の引いたレールを自ら外れ、学校を中退し、社会に放り出された彼だ。生きていくために藁をもつかむような必死の想いがそこにはあったのではないだろうか。未成年の少年が大人の庇護を離れ、一人社会の中で生計を立てていくということは、多くの場合、悪しき時代性にのみ込まれてしまうということを示しているのではないだろうか。

> 方定煥はお金が必要だった。彼は腹がへり喉が渇いた。しかし、いつも彼が渇きを感じていたのは、むしろ精神的な渇きである。本を買うお金がほしかった。二十銭という安い日給を節約し、方定煥はピジトクやホットク一つで食事を間に合わせた。その上に食事を抜いて飢えながらも、読み物を求め我を忘れて読書に耽った。彼が好んで求めた本は、六堂・崔南善の新文館から出るものなどだった。『赤いチョゴリ』（1913年1月～1913年7月、通巻7号）、『子どもたちの読み物』（1913年9月～

1914年8月、通巻12号)、『新しい星』(1913年9月～1915年1月通巻16冊) 等、新文館の雑誌は相次いで強制廃刊にあい、1914年10月には『青春』が発刊された。『青春』創刊号は、当時では破格的といえる菊判三百面に達したし、以後通常百五十面に達した超大型月刊総合雑誌だ。方定煥は『青春』の愛読者であり投稿者でもある。(李相琴、47頁) [x]

4. 方定煥の結婚── 1917年（17歳）

15歳で初めて職に就いた方定煥だったが、その2年後にはもう結婚している。朝鮮社会は伝統的に早婚であった。そして、この結婚こそ、方定煥の運命を大きく変えるものであった。方定煥は、当時百万から二百万もの教徒が信奉したといわれる天道教の教祖である孫秉熙（ソン・ビョンヒ、1861～1922年、忠清北道清原郡生まれ）の三女孫溶嬅（ソン・ヨンファ）と1917年4月8日に結婚したのである。この日は孫秉熙の誕生日であった。

さて、この天道教という宗教団体は一体どのような存在であったのだろうか。またその教祖である孫秉熙という人物はどのような人物であったのだろうか。天道教を知ること、また孫秉熙を知ることは、方定煥とその「オリニ運動」を理解する上での核心部分に該当する。

天道教は、日清戦争の発端として知られる1894年に朝鮮で起きた農民蜂起（東学党の乱）に多くの信徒が参加していたことで知られる東学と呼ばれた宗教団体をルーツとしている。東学は、従来の仏教や儒教とも、当時朝鮮社会に広まり始めた西洋のキリスト教（天主教）を指す西学とも違う新たな朝鮮独自の宗教団体として、1860年に崔済愚（チェ・ジェウ、1824～1864、慶尚北道慶州生まれ）が起こした。その第三代教祖が孫秉熙であり、孫秉熙が東学の名称を天道教と改称している。つまり天道教はもとは東学だったのである。

東学は、朝鮮社会の支配階級の思想体系であった儒教と正反対の性質を持ち、「侍天主　造化定　永世不忘　万事知」の13文字を唱えるだけで救済されると説き、その信仰対象は＜ハヌニム（天の神さま）＞という朝鮮社会の基層文化であるシャーマニズムに通じるものであったため、これまでの朝鮮社会において抑圧されてきた下層農民あるいは賤民層に広まっていった。そして、東学が生まれたころの朝鮮というのは旧来の封建社会が大きく変革していく時代である。

1876年には日朝修好条規（江華島条約）が結ばれ、日本が列強諸国さながらに朝鮮社会に介入していく。清国との冊封関係からの独立を認め、従来の東アジアの中華秩序を無きものとし、鎖国状態だった朝鮮を開国させた。必然的に外国資本が流れ込み、朝鮮社会に近代が入り込んでいった。すると、旧体制に不満を持つものはこれを機に朝鮮社会の近代化と変革を目指すが、一方で旧体制の既得権を手放したくない者たちは反動体制を固めようとする。これは支配層の葛藤であるが、そうした支配層の権力闘争は暴政を生み民衆を益々苦しめた。

朝鮮の近代化を目指す開化派（独立党）と、清国の冊封国（属国）に戻り鎖国すべきと考える旧守派（事大党）との分裂は、そもそも王宮の中心部にその対立構造があった。当時の国王である高宗の后の閔妃と政治の実権を握っていたその一族は開化派で、父親（興宣大院君）は旧守派である。やがて壬午事変（1882年）や甲申政変（1884年）などの朝鮮社会内部での度重なる政変が起こりそのような変革の混乱を背景に、今度は農民などの下層民たちが武装蜂起したのである。これが東学党の乱で、東学第二代教祖崔時了（チェ・シヒョン）が1894年に起こした。この農民蜂起は、実権を握っていた閔妃政権が清国に援軍を求めたことから天津条約に基づき日本の進軍を招き、日清戦争に発展していくのである。

清と日本の進軍によって東学の乱も鎮圧され、その後二代教祖崔時了は処刑された。そして孫

秉熙が第三代教祖となるのである。孫秉熙が東学を天道教と名称変更したいきさつについては、後で李相琴の研究を引用しながら触れるが、ここでは、方定煥の結婚が、朝鮮の変革の近代史における重要因子の一つである東学の、第三代教祖の娘婿になることであったという意味の大きさを認識しておきたい。

ところで、なぜ、方定煥はそのような縁に恵まれたのだろうか。それは、子息の結婚は親が決めるという朝鮮社会の伝統にもれず、方定煥の父親が関係している。方定煥の父、方慶洙は、天道教（東学）を信奉していた。そして、一信徒であっただけでなく、孫秉熙に最も近い人物である権秉悳（クォン・ビョンドク、1868年～1944年、忠清北道請願生まれ）の弟分として長らくその近くにいたようである。義兄弟の契りを結んでいたとも言われている。その権秉悳が義兄弟の弟分として可愛がった方慶洙の息子の方定煥を、孫秉熙の娘婿に紹介したのである。権秉悳は天道教の重要人物であり、1919年3月1日の独立宣言でも天道教代表として孫秉熙とともに署名を残しており、孫秉熙の臨終も看取っている。李相琴は次のように述べている。

> 方定煥の父親の慶洙が入信したのは1907年末頃だ。家業が潰れ、家がめちゃくちゃになった直後のことである。慶洙の年齢は28才で、年老いた両親と幼い方定煥を抱え、上に下に見守らなければならない大家族の生計を支えるということは、どれほどつらい思いを彼にさせたことだろう。彼が初めに教団の門を叩いたのは侍天教であった。侍天教は東学の内紛から生まれた分派である。事情は次のようだ。
>
> 孫秉熙は1901年から1906年初めまで東学に対する逮捕令を避けて、海外の文物に触れるために李祥憲という仮名で日本に亡命していた。当初米国に行こうとしたが意の如くならず、日本に留まることになったのである。国内の東学人とは秘密裏に連結していた。当時国内の総責は李容九だ。孫秉熙の指示により李容九は東学を進歩会という名前に変えてその教勢を拡張していた。
>
> おりしも露日戦争（日露戦争）勃発前後の韓国の情勢は不安だったし、親日勢力が大手を振って歩き始めた。日本の政治資金で日本人顧問まで置いた宋秉畯が導く一進会がそれだ。維新会から始めて、一進会に名前を変えた宋秉畯の組織基盤は実状では首都圏の一部に留まる貧弱なかたちだけの団体であった。彼は李容九に接近して、あなたが導く進歩会は近い将来東学であるという実体が明らかになって監視を受ける恐れがあり、そうなると活動が難しいだけでなくあなたの身辺も安全ではいられないだろうという懸案事項から、彼と結託して1904年10月に進歩会を一進会に吸収統合させてしまった。進歩会の全国的な強大な組織と一進会の日本の庇護が合わさってできた新しい一進会は、徹底した親日組織になる。この時から、李容九は孫秉熙を押しのけて会を思いのままに操縦した。そうして、とうとう韓日保護条約（日韓保護条約）の支持声名を出すなど、日本の手先の役割をすることを躊躇しなくなったのだった。
>
> 李容九の背信と親日行為にいきりたった孫秉熙は、日本から帰国する直前、日刊紙に東学を天道教と改称し宣言した。1905年12月1日のことだった。引き続き1906年1月25日に帰ってきた孫秉熙は、李容九に考えを変えるように勧めたがすでに心が離れた彼は手のつけられない状態であった。孫秉熙の帰国と時を同じくして2月には統監部が設置されたので、親日派に変身した李容九は意気揚揚とするばかりだった。1906年9月孫秉熙は苦心の末、李容九など62人を教籍剥奪処分として除名するに至る。李容九一党は、それまでの間引き受けていた進歩会の財産を丸ごと持ち出し、

その年の12月に侍天教という教団を創立させた。

方定煥の父親、慶洙がなぜ侍天教に行ったのかは分からない。ただし、そこで権秉悳に会ったのだ。権秉悳は1868年生まれであり、慶洙より十一才年長者として慶洙がずいぶん頼り従っていたようだ。（李相琴、54～56頁）[xi]

孫秉熙と権秉悳の関係、方慶洙が侍天教から天道教に移ったいきさつはこうだ。

甲午年の東学革命は、南方の全琫準と北方の孫秉熙が総指揮をした。この時、北方の主導人物として権秉悳は金演国と共に忠清道報恩で起泡し戦闘に臨んだので、この二人は生きるか死ぬかを共に過ごした深い縁で結ばれた間柄であった。

日本から急に帰国した孫秉熙は、天道教という新しい宗教団体のスタートに際して、大道住職を金演国に委譲した。本来金演国は孫秉熙とともに第二世教祖亥月の高弟で、東学を牽引してきた重鎮だ。金演国は孫秉熙より年長で入徒経歴も古いにもかかわらず、孫秉熙の指導力と包容力にいつも押されていたのだった。一進会の李容九は金演国のそうした不満気な内心をよく知っていた。そのため、金演国を侍天教の高位職大宗師にむかえるといって彼を天道教から侍天教に転信させた。この時、権秉悳も金演国と共に侍天教に行ったようだ。

ちょうど始まったばかりの天道教の新しい大道住金演国の離脱に、当時の孫秉熙は当惑し少なからぬ打撃を受けたに違いない。彼はまもなく朴寅浩を第四世大道住とすることで事の収拾にあたった。

しかし、まもなく侍天教が第三世教祖孫秉熙を裏切り、親日派として背を向けた李容九が導く教派であることが知られるや、東学教徒たちは大挙して孫秉熙の天道教に戻ることになる。この時、権秉悳について方慶洙も天道教に行ったのだった。（李相琴、57～58頁）[xii]

こうして方定煥にも、父親方慶洙が信奉する天道教との関係が結ばれていったのだろう。しかも、父方慶洙が教団の中でも特に親しんだ兄貴分が教団の実力者である権秉悳である。権秉悳は教祖の孫秉熙の近くにもいた。そうしたつながりで、三番目の娘溶嬅の婿候補として方定煥が浮上した。しかし、それはあくまでもきっかけであったに過ぎない。

結婚は、孫秉熙自身が方定煥と面会し、その目を見て決めたものだという。李相琴は次のように指摘している。

孫秉熙が方定煥の目を見て婿としたという話は、子ども用の伝記にも書いてある。目は心の窓というが、方定煥のどんなところが気に入ったのだろうか。孫秉熙をよく「熊体虎相」と表現する。熊のように威厳のある体格に、顔は虎のようだという意味である。彼の目つきは相手を圧倒する威力があったというのに、そのような虎の目つきをまっすぐに受け返した方定煥の目つきも平凡でなかったのだろう。明らかに彼の未来を感知させる通常でない何かが映っていたのだろう。（李相琴、59頁）[xiii]

5. 嘉会洞の妻の実家での生活

このようにして方定煥は満17歳で結婚した。しかも相手は天道教（東学）第三代教祖孫秉熙の娘で、孫秉熙は結婚した年の二年後の1919年に三・一独立運動を主導し、独立宣言書を読み上げている。韓国近代史に名を残す重要人物である。李相琴は「男版シンデレラ」と評している。

現在の年齢計算では満17才と15才である。当時としては普通かもしれないが、早

い結婚だった。教祖の誕生日を兼ねて、結婚式は盛大に行われた。食事も満足に取れなかった方定煥は、もう衣食住に何の心配もなくなった。男性版シンデレラのような運命だったといえるだろうか。

結婚後、孫秉煕と洪氏夫人、そしてその娘たちと共に嘉会洞の広い妻の実家で暮らすことになった。洪氏夫人は婿の健康に精を尽くした。しかし、母親の過剰な干渉にいつも従順で慎ましい溶嬅は、せっかくの妻の役割を奪われるかたちとなり母娘間の葛藤が生まれたりもした。当事者である方定煥は、良い物を食べ精力剤を飲み、日に日に体が肥大化していった。後世の人々が知っているぽってりとしたイメージはこの時から作られたのだ。（李相琴、56 ～ 60 頁）[xiv]

方定煥は、それまでの伝統的な朝鮮社会において独立した人権が認められていなかった子どもの人権を尊重した「オリニ運動」の発起人であり、また近代韓国児童文学の父として現在も尊敬され、韓国の児童文化運動の精神的よりどころとして象徴的存在となっている。これまでの秩序が崩壊し、社会は大きな変革の時を迎え、混乱し困難であった時代に、最も弱い立場にある幼い子どもたちの立場から人権の尊重と民族の独立を訴えた英雄的存在である。そうした方定煥が韓国の人々の脳裏に思い描かれるときは、決して貧困に苦労して痩せこけた姿ではない。精力的に動き回った体力の持ち主であることを体現した恰幅の良さと堂々とした安定感のある姿である。オリニ大公園に建てられた方定煥の銅像はまさにそのようなどっしりとした構えのものである。そうした容姿は、結婚後に作られたものだった。新婚時のエピソードとして、次のようなものもある。

方定煥の長男、運用は、母や叔母らに聞いたエピソードをたくさん記憶している。新婚初期を回顧して、溶嬅が話す夫のからだは関節の音がカチカチするほど痩せていたという。時々溶嬅は結婚したばかりのころは骸骨と暮らしたみたいだったと笑った。徐々に太って、人物が明るくなったけれども、特に彼の手はまるで女性の手のようにきれいで美しかったという。

多情多感で愛想のいい方定煥は、家族たちに大人気であった。溶嬅の下の二人の妹たちは、姉の夫と呼ばず「新しいお兄さん」と呼んでなついた。絵も描いてやったし昔話もしてやった。

ある日、魚を煮て骨は原形のとおり置いて、ピンセットで肉を取り出して、魚の解剖標本を作ってくれた。その手並みがあまりにも良かったので、標本額縁に入れて壁に掛けておいたという。方定煥の手先の器用さはやはり尋常ではなかったようだ。

また、料理も好きで上手だった。酢豚をよく作って隣家の子どもたちに振る舞うことが好きだった。贈り物を選ぶセンスが優れ、受けとる人をがっかりさせることは決してなかったという。（李相琴、60 ～ 61 頁）[xv]

6. 妻の父・孫秉煕

天道教第三代教祖孫秉煕の娘婿として、伝統的な朝鮮社会の大家族制そのままに多世代が一緒に暮らす生活を嫁の実家で始めた方定煥について、李相琴は次のように述べている。

孫秉煕と一つ屋根の下に住むことになった方定煥は、妻の父の期待に応えようと心の底で決心したことだろう。妻の父の配慮により普成専門学校で勉強もすることになった。『青春』、『有心』、『天道教会月報』、『新青年』に投稿する文もこまめに書いたし、何より天道教に対する勉強を熱心にした。方定煥にとって孫秉煕は、妻の父というよりは宗教家として、社会的指導者とし

て、常に高いところにいる敬うべき大きな存在であった。彼は義父様とは呼ばず、いつも「私たちの先生」と呼んだ。(李相琴、66頁) xvi

普成専門学校は、現在の高麗大学の前身である。1999年に方定煥誕生100周年を記念して、高麗大学校は彼に名誉卒業証書を授けたことがある。民族主義的な色彩の強い教育と研究で現在も韓国を代表する大学だが、方定煥もその系譜に連なっていたというわけだ。そして、方定煥が再び学校で学べるようになったのも妻の父孫秉熙のお陰である。普成専門学校は、孫秉熙と天道教が学校経営にかかわっていた。

孫秉熙は、宗教家として天道教を率いるだけでなく、学校経営にも積極的に力を注いでいた。孫秉熙は東学農民蜂起の後、東学の第三代教祖として活動していたが、第二代教祖崔時了の処刑や周囲の東学の徒の逮捕に続き、自身の逮捕を避けるために1901年から1906年初めまで日本で李祥憲という仮名で亡命生活を送っている。その時に、日本の進んだ教育と近代文化に接し、近代的な学校教育の重要性に目覚めたようだ。李相琴は次のように説明している。

彼が亡命中に見た日本の近代化は眩しかったし、井の中のカエルのような私たちの後進性を認めないわけにはいかなかった。

日本は明治維新直後、西欧式学校教育制度を実施して、1890年には小学校4年を義務教育化した。孫秉熙が日本に滞在したときにはすでに進学率は92パーセントであった。1907年から小学校6年間の無償義務教育を実施すると、進学率は97.38パーセントまで向上する。文盲がいないから出版事業が旺盛で、世界文物の情報伝達が迅速にならざるをえない。日本の近代化は、学校教育の振興が後押ししたことを孫秉熙ははっきりと見たし、実感することができた。(李相琴、73～74頁) xvii

そこで、孫秉熙は、まず2度にわたって計64名の若者を日本に留学させている。その中には後に朝鮮近代文学史に大きな名を残した李光洙（イ・グァンス）もいた。当時14才の最年少留学生であった。そして、1906年に孫秉熙が帰国して真っ先に行ったことが、私立普成学校への支援と育成であった。以下、少し長いが、近代韓国における独自の教育救国運動としての私立学校教育に関わる事情を知るために李相琴の研究を引用する。

帰国直後の1906年3月に、私立普成学校校長キム・チュンファンに80ウォンの支援金を送った。これを筆頭に、ひきつづき財政難に苦しむ私立学校23校に、学校規模や財政状況に応じて20ウォンから80ウォンを寄付した。教育救国主義精神によって私立学校が盛んに設立された頃だ。しかし、ほとんどすべての学校の財政は、ぜい弱なことこの上なかった。孫秉熙は引き続き閉鎖危機に置かれた学校に補助金を惜しまず送ろうと考えた。

しかしその年、天道教から教籍剥奪された一進会の李容九一派がそれまで管理した教会財産を出さなかったために天道教自体が財政難に直面することになってしまった。したがって私立学校支援事業は一時中断するほかはなかった。

天道教が組織と財政面からの主導的な立場で念願だった学校教育の振興に参加することができるようになったのは韓日合邦となった1910年以降のことである。

孫秉熙の教育事業業績の中で最も著しいものは、普成学院と同徳学院の育成である。当時、普成学院は廃校直前だった。設立者イ・ヨンイクは、学校設立後ウラジオストックに発ち、1907年にそこで54才を迎え病死したと伝えられているが、震檀学会

が出した『韓国史』には、1907年1月に暗殺されたと記録されている。彼の孫、イ・ジョンホが、教祖校主であったが、当時19才の若者であったため、増える借金に耐えられず、彼も日本当局の監視を受ける境遇となり、ウラジオストックに逃れ身を守ることになる。教祖のいない普成学院の職務代理をした尹益善から前後の事情を聞いた孫秉煕は、天道教が取得することに合意を得ることになったのだ。

1910年12月21日、天道教の当時の大道主朴寅浩の名義で、8,000ウォンの債務清算費を修交して学校経営権を取得した。その内容は、3年の内に旧教祖が帰国して権利返還を要求する時は実費返還し、3年が経過した時にはすべての権利は天道教に帰属するというものだった。

小学校、中学校、専門学校までそろえた私立学校を引き受け運営することになった天道教は、意欲的に学校の発展的経営に乗り出すことになる。専門学校校長に尹益善、中学校校長には天道教に今しがた入信したばかりだが、後に重鎮となった崔麟が就任した。しかし、天道教という特定宗教団体が運営するにともなう学生と学生父兄の不安は、集団で辞退願いを出すなど天道教に対する拒否反応を引き起こすに至る。当初、宗教的色彩は強要しないという約束だったが、天道教会の立場では学校運営に教会が全く関与できないならば、学校経営をあきらめるという教会幹部の強硬な態度も侮れず、しばらく葛藤が続いた。この問題は、相互間の理解によって収拾され学生数も日に日に増加した。

パク洞（現在の寿松洞）にあった旧ロシア語学校から始まった普成学院は、建て増しを繰り返したが、昼間は小学校と中学校が使い、夜は専門学校が使わなければならない小さな学校だった。1914年に達して、旧校舎を壊して洋館2階校舎を新築し、二部制にして使った校舎の問題も解決した。普成学院は天道教が引き受けて運営した後、朝鮮総督府の学制に関する干渉による困難な問題にもぶつかった。すなわち、専門学校の名称が使えなくなり、1915年には私立普成法律商業学校と呼ばざるを得なくなった。しかし、実質的には法科と商科（経済学科を改編）を置き発展の一路にあった。1918年には楽園洞に賃借り契約だが新校舎を用意して、専門学校の専用校舎として使うことになった。この時から専門学校は分離独立することになったのだ。専門学校の名称を正式に使うことになったのは1922年に新しい財団がスタートしてからである。

ところで、想像しなかったことが起こった。前教祖イ・ジョンホが現れて、学校返還を要求したのだ。彼は海外逃避中1917年に傷害で逮捕されて帰国していた。1年間は故郷の鳴川に居住制限を受けたが、1918年に解放され、普成学院の返還を要請したのである。初めから、3年以内に返還を要求すれば実費返還をするという約束だったが、すでに8年が過ぎていたし、その間の経費は20万ウォン余りに至っていた。

尹益善校長は、まもなく義菴・孫秉煕に知らせて相談した。彼は、教育事業は為公無私の精神で始めたことなのだから無弁償で戻した方が良いという意見であった。そのため、天道教幹部らは孫秉煕の大きな意を敬って無条件に返還することにした。

1918年10月16日には尹益善校長と崔麟校長の辞表とともに、すべての事務引き継ぎまでが終わった。あとは朝鮮総督府の認可だけが残されたのだが、当局はイ・ジョンホには学校を維持するほどの財団構成能力がないという理由で設立者変更申請を許諾しなかった。これによって普成学院は継続して天道教が運営することとなったのだ。

こうした渦中に、方定煥は1917年の結

婚直後、普成専門学校法科（当時の私立普成法律商業学校）に入学することになった。（李相琴、74 ～ 77 頁）[xviii]

方定煥の結婚相手の父親である孫秉熙は、天道教の教祖として教団を率い宗教的な思想を伝道しただけでなく、民族の自立と近代的国家建設のために私立学校教育の振興に力を注いでいたのだった。その流れで、方定煥も義父の教団が運営する普成専門学校（後の高麗大学校）に入学することになったのである。現在、韓国の教育史研究では、こうした一連の所謂＜教育救国運動＞は大変重要視されている。自発的な自立と近代化への意志が民衆の中に強固に存在し、格闘していたという事実は歴史観の要となっている。

東学ならびに東学農民戦争から続く天道教と孫秉熙、そして孫秉熙の娘婿となって彼が支援し運営した私立学校で学んだ方定煥と後に彼が興した＜オリニ運動＝子どもの人権と文化の運動＞はそうした歴史観の中で一連の動きとして評価されているのである。

李相琴は孫秉熙について次のように整理している。

孫秉熙の功績の中で、学校教育に注いだ誠意は省略することができない。1906 年 2 月 16 日、孫秉熙を歓迎するために独立館に集まった教導と一般人に演説する時、民族魂を鼓吹して独立精神を育成させる最も重要な道には二種類があると力を込めて強調したことがある。

“その一つは、天道教が東学唱道以来の精神を継承して、それを実現することで、また一つは、学校教育を振興させて民志民智を開発して技術を習得し、民族生活の土台を強硬にすることで民族の力量を培養するところにあります。”彼が指向する目標は宗教としての天道教発展と学校教育の育成だった。（李相琴、73 頁）[xix]

また、孫秉熙は出版事業にも力を注いだ。信仰がその基盤にあるのだが、社会事業として学校教育と出版活動に力を入れた事実は、まさに近代への志向であった。学校教育と出版事業の二点は、孫秉熙が日本亡命時に見た日本の近代から彼が着目したものだと言える。方定煥は、義父の学校で学び、出版を学び、そして韓国初の児童文芸誌『オリニ』を創刊し児童文学を開拓していくのである。

この他にも孫秉熙は出版事業で民志を向上させようと意図したことがあって、普門館、普門社、普成社など出版社を運営した。この事業にも迂余曲折が多かったが、3.1 運動の時、独立宣言書を普成社で印刷したことはよく知られた事実だ。1906 年帰国直後に『万歳報』という新聞を発刊して呉世昌がその責任を引き受けて 1 年間運営したこともあった。

また韓日合邦直前に『天道教会月報』という機関紙を創刊したことがある。孫秉熙は出版事業の重要性を分かっていた人だ。

嘉会洞の妻の父の家に住むことになって、方定煥が確かに感じたものは妻の父が教育事業に注ぎ込む情熱だった。育ちゆく世代に希望をかけ、物質から精神から全力投資する妻の父の大きな志に深い感銘を受け、同時に高ぶる尊敬の念を禁じられなかった。教育は未来を約束し、未来は今育つ幼い人のものだという確信が、方定煥の胸に根をおろしていた。（李相琴、79 頁）[xx]

7. 天道教人としての方定煥

こうして方定煥は、父親が天道教の信徒であったこととその人間関係から、時代を象徴する教団教祖の娘との結婚に至る一大転機を迎えた。代々その教団に所属することを＜継代教人＞と呼ぶが、方定煥は父の代からの継代教人に他ならない。しかし、個人としての方定煥の

信仰はいかほどのものだったのだろうか。この点に関して、李相琴は次のように述べている。

> 方定煥が継代教人として孫秉熙の婿になった後、彼にとって何よりも急を要し切実だったことは、名実共に正しい天道教人にならなければならないという問題であった。父親が天道教人であるから自ずと教会信者になったというのではなく、妻の父が教祖であるから自ずと教会信者になったというのは随分違うという点を、方定煥は誰よりも深く自覚していた。また信仰は各人のものということもよく分かっていた。彼の良心と良識が天道教人として精進させた。故に普段妻溶嬅に、“生まれ変わることができるならば、天道教をもう少し徹底して勉強してさらに深く信じたい。”と繰り返し言ったというのは、自身の修道生活に対する自省からのものだったのかも知れない。(李相琴、94 頁) [xxi]

方定煥は、19 才の時に家で漢学を勉強するために老教師 1 人を迎え漢書を読んでいた。[xxii] 孫溶嬅と結婚して嘉会洞の妻の実家で新婚生活をしている時だ。李相琴は、この時期に今さらなぜ漢書の勉強をしたのだろうかという疑問を持ち、恐らく漢書というのは天道教の経典である『東経大全』でないかと推測している。

> 天道教の教理の勉強は、『東経大全』と『龍潭遺詞』を読むのが基本だ。『東経大全』は純漢文になっているので、漢字自体が表意文字だから、文字一つ一つに含まれたその奥深い意は注釈なしでは理解し難い。『龍潭遺詞』はハングルによる歌辞体だが、万古流転の故事と慶辞が多く、これまたそのまま読んで理解することは難しい。方定煥は誰か教会の長老の先生に個人指導を受けて、経典の勉強をした可能性が大きい。(李相琴、95 頁) [xxiii]

方定煥の思想を理解するためには天道教の教義を理解しなくてはならない。もとは東学であった天道教の基本概念を理解するのは容易なことではないが、韓国では尹錫山（ユン・ソクサン）の『注解東学経典 (東経大全・龍潭遺詞)』(東学社、2009 年) [xxiv] やキム・ヨンオクの『도올심득 東経大全』（통나무、2004 年）が出ており、日本語では呉知泳『東学史』が梶村秀樹の訳と解説で読める（平凡社、1970 年）。

『東学経典』は、東学を興した初代教祖の崔済愚が 1860 年から 1863 年までの 3 年間に書いたもので、漢文で書かれた『東学大全』とハングルで書かれた『龍潭遺詞』から成り立っている。漢文で書かれた『東学大全』は、知識層に向けたもので、ハングルで書かれた『龍潭遺詞』は、漢文の素養のない下層階級の者に向けたものであると解釈できる。

また、文字表記が漢字となっているのか、庶民にも分かるハングルとなっているのかだけでなく、内容も漢字で書かれたものとハングルで書かれたものでは異なっている。つまり、『東学大全』は、より論理的で体系的に記述されており、『龍潭遺詞』は民衆の夢と理想が込められているのである。これは、庶民階級に支持された東学の特徴を明確に示している。

漢文で書いた『東学大全』は、教義や思想の意味を、表意文字である漢字を通して合理的理性的に伝達しようとしたものであるのに対して、『龍潭遺詞』は、庶民の文字である表音文字のハングルを通して大衆を感化するものであった。『龍潭遺詞』は詩歌の形態をとっており、民衆の夢や希望が詠われていると言っていい。

崔済愚の思想は、停滞と悪幣が蔓延していた前近代的封建秩序という朝鮮内部の問題と、東洋を侵犯する西洋の近代という外勢を同時に批判し克服しようとするもので、西洋の思想に対する新しい信念体系として＜東学＞と言った。東学の教えは、内に対しては腐敗した封建秩序に抵抗し、外に対しては帝国主義列強の侵略を主体的に克服しようとするものである。つまり、

二重の困難を克服していくべき命題がその核心部分にあったのである。そのため、封建的朝鮮の旧勢力からの弾圧と帝国主義列強の武力によって崩壊の危機を迎えた（東学農民戦争／甲午農民戦争／東学党の乱）。そしてその後東学の第三代教祖を継承した孫秉熙によって、天道教と名称変更されながらその思想と教義は実践されていったのである。

最後に、東学を継承する天道教の核心教義を要約したい。李相琴が簡潔にまとめているので引用する。

> 天道教の信仰対象はハンウル様だ。東学の唱道者である崔済愚は、‘侍天主’を前に出して、一人一人が心の中にハンウル様を迎えると説明した。第二代教主崔時享は‘事人如天’として、人に仕えることをハンウル様に仕えるようにと布教した。孫秉熙は‘人乃天’として神人合一、すなわち人はまさにハンウル様だという概念で天道教の真髄を規定した。強調された表現は少しずつ変わっているが、ハンウル様を仕える‘侍天主’信仰の根本は終始一貫している。（李相琴、95～96頁）[xxv]

「ハンウル様」というのは、日本語でいう「お天道様」のことだろう。まさに天道教の＜天道＞である。唯一絶対の神や人格神ではなく、天や空や宙そのものを神＝天＝ハンウル様と言っているのである。そして、孫秉熙は人はハンウル様＝天であるというのであるから、方定煥がその中で生きた天道教の思想とは、大人も子どももどのような人であってもお天道様を想うのと同じように敬いなさいという究極の人権尊重思想であり本質的な万民平等を唱える思想であったといえる。

8. おわりに

本稿では、近代韓国児童文化運動の中心人物であり、近代児童文学の開拓者である方定煥の青年期、特に彼の人生を大きく変えた結婚について、韓国における代表的な方定煥研究者である李相琴の大著『小波・方定煥の生涯 —— 愛の贈り物』（ソウル：ハンリム出版社、2005）（이상금『소파 방정환의 생애−사랑의 선물』한림출판사）を読みながら考察した。

方定煥は本来、代々王宮に食材を納品する豪商の家門の出で、王宮の目の前に位置する立派な瓦屋根の屋敷を生家とする裕福な家庭に生まれた。しかし、彼が産声を上げた19世紀末朝鮮はまさに社会秩序が激変する大規模な地殻変動の時代であり、そうした時代背景そのものが宿命として彼の人生を大きく動かしていった。

王宮の没落と共に王宮御用達の商家であった方定煥の家も廃業に追い込まれ、生活は激変困窮を極めた。それでも伝統ある朝鮮の富裕な家の美風といえる学問への志向は、方定煥の学歴にも表れている。貧困の中にあっても彼の祖父や父は方定煥が満五歳になった早い時期から学校に通わせた。最初に通った学校は、現在の韓国教育史において高く評価されている愛国啓蒙運動、あるいは教育救国主義私立学校運動の代表的な私立学校として有名な普成小学校である。その後二つの普通学校を経て、善隣商業学校に入学し、そこを中途退学するまで方定煥は貧しい暮らしの中で学業を続けたのである。

しかし、貧困の中に通った善隣商業学校は中途退学してしまい、15歳で朝鮮総督府土地調査局の書字生という職に就いた方定煥であったが、その2年後に転機を迎えた。それが、広く朝鮮社会にカリスマ的影響力を持っていた天道教の指導者孫秉熙の三女との結婚であった。この結婚こそが方定煥の人生を大きく変え、歴史に残る数々の仕事を成し遂げる契機となったのである。

本稿では方定煥の人生の転機となった結婚とその背後の人間関係を中心に考察した。そこには、既存の社会秩序が崩壊する時の人々の不安な心理が反映してか強力な信仰集団の人間関係と教理が存在していた。方定煥の結婚は天道教

という教団の人間関係と信仰が大きく関係している。そして、天道教と方定煥の考察は、近代韓国児童文学の開拓者とよばれる方定煥の文学や児童文化運動そのものを解釈する上で最重要項目となることは言うまでもない。近代韓国児童文学の本質を理解するには、その開拓者である方定煥の理解が不可欠で、方定煥を理解するには天道教とその思想の理解が不可欠なのである。

＊本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））、（課題番号： 24520409）による研究成果の一部である。

参考文献

・李相琴『小波・方定煥の生涯 —— 愛の贈り物』seoul ：ハンリム出版社、2005年
（이상금『소파 방정환의 생애−사랑의 선물』한림출판사）

・李相琴「方定煥と「オリニ」誌 —「オリニ」誌刊行の背景 —」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集 1995 ～ 1996』1997年

・李相琴「日本と韓国にかける児童文化の橋 ～韓国オリニ文化をとおして考える～」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集 1995 ～ 1996』1997年

・李在徹『韓国現代児童文学史』seoul ：一志社、1978年
（이재철『한국현대아동문학사』일지사）

・李在徹『韓国児童文学作家論』seoul ：一志社、1983年
（이재철『한국아동문학작가론』일지사）

・李在徹「児童雑誌『オリニ』研究」、『韓国児童文学研究』seoul ：啓蒙社、1983年
（이재철「아동잡지 '어린이'연구」,『한국아동문학연구』계몽사）

・李在徹「韓国児童文学の歴史と現状」、児童文学者協会『日本児童文学』1990年6月号

・李在徹「1920年代の韓半島の児童書 —— 児童雑誌を中心にして」、『子どもの本・1920年代展図録』1991年

・李在徹「韓日児童文学の比較研究（1）」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集 1989 ～ 1990』1993年

・呉知泳著、梶村秀樹訳注『東学史 — 朝鮮民衆運動の記録』平凡社、1970年

・大竹聖美「方定煥研究～誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景：評伝『小波・方定煥の生涯 —— 愛の贈り物』を読む～」、東京純心女子大学『紀要』第18号、2014年

・キム・ヨンオク『도올심득 東経大全』통나무、2004年
（김용옥『도올심득 동경대전』통나무）

・尹錫山『注解東学経典（東経大全・龍潭遺詞）』東学社、2009年
（윤역산『 주해 동학 경전（동경대전・용담유사）』동학사）

---

[i] 1971年に40周忌を記念してソウルの中心にある南山公園に立てられたが、1987年5月3日にオリニ大公園に移転された。

[ii] 善隣商業学校は現在、善隣インターネット商業学校に名称変更し同地に存在している。

[iii] 方定煥研究者。方定⊠の評伝に『小波・方定煥の生涯 —— 愛の贈り物』（ソウル：ハンリム出版、2005年）がある。元梨花女子大学幼児教育学科教授。

[iv] （原文）
　아버지의 소망을 저버리고 상업학교를 그만둔 것은 점점 더 궁색해지는 집안형편도 현실적인 이유였으나 무엇보다 그 학교의 공부가 싫었던 것이다. 상업부기와 주판이 주과목인 공부는 정환이 견딜 수 없는 것이었다. 지금의 말로 표현하자면 도저히 적성에 안 맞았기 때문이다. 졸업만 하면 금융기관에 취직이 보장된다는 상업학교를 그는 미련

없이 떠나 버렸다.

그렇다면 정환은 무엇이 되고자 했을까. 그는 어려서부터 남다른 소질을 가지고 있었다. 그의 소질은 쉽게 말해서 이과형이 아니라 문과형이며 또한 예술가의 소질이 풍부했다.

그는 야주개의 장난꾸러기 시절부터 어머니의 경대 주위에 홑이불로 휘장을 둘러 연극 놀이를 했었다. 훗날 정환은 연극에 관심을 가지고 각본을 쓰고 주연과 연출도 하고 연극 잡지도 내게 된다. 그리고 무엇보다 그는 사람을 좋아했고 골목대장 시절부터 많은 아이들을 모았다. 그가 생애를 통해서 소년단체를 만들고 지도자를 모으는데 주도적 역할을 해낸 것은 우연한 일이 아니었다.

정환이 열 살 (만 여덟) 때 ‘소년입지회’를 만들었다니 참으로 조숙한 소년이었다.

[v] 柳光烈（ユ・グァンヨル）：1898－1981年京畿道坡州生まれ。1914年ソウル宝成法律商業学校に入学したが2ヶ月で追放される。1917年、方定⊠と青年クラブを組織し、機関誌「新青年」を発行した。1919年、毎日新報社に入社し記者生活を始め、1920年「東亜日報」創刊と共に創刊社員として入社。後に社会部長となった。1924年、朝鮮日報社に移り社会部長を務め、「中外日報」編集局次長を経て、1933年「毎日申報」編集長を務めるなど、当時朝鮮語で発行された民間の3大紙と朝鮮総督府による日本語新聞である「毎日申報」の四新聞社すべてに勤務した。

[vi] 1886～1965年。近代韓国初の西洋画家。1909年日本に渡り、東京美術学校洋画科入学。5年後に帰国し新美術運動を展開した。解放後は朝鮮美術建設本部委員長、朝鮮美術協会会長などを歴任。

[vii] (原文)

정환은 어릴 때부터 남다른 손재주가 있어서 그림을 잘 그렸다고 한다. 어느 화가가 정환이 영민하고 소질이 있는데도 집안이 구차해서 소질을 발휘할 수 없으니까 자신이 양자로 삼으려고 청을 하였다. 그러나 정환이 외아들이어서 이루어지지 않았다고 전해진다. 어디에서 어떤 인연으로 화가를 만났는지는 알 수 없다. 다만 뒤에 절친한 친구로 사귀게 된 유광렬의 기록 (1973.1 ‘방정환’ < 월간중앙 >) 에 고희동高羲東에게 서양화를 배운 일이 있다고 하였으니 구체적인 이름이 나온 것은 이 기록 뿐인데 정환에게 직접 들었을 가능성이 크다.

고희동은 우리 나라의 서양화가 1 호이며 후에 동양화로 전향한 대가이다. 그는 부친이 여러 지역 군수를 지낸 관리의 가문에서 1886 년에 태어났으며 일찍이 개화사상에 눈뜬 아버지의 영향으로 불어와 그림공부를 한 사람이다. 1909 년 2 월에 동경미술학교에 한국인 1 호 유학생으로 입학해서 5 년간 공부를 했다니 정환과 만난 것은 그 이전일 것이다. 그 때 고희동은 22, 3 세쯤 밖에 안 되었으므로 양자 운운은 제자로 삼고 싶다는 이야기의 와전이 아닌가라는 생각이 든다. 그러나 이것은 예삿일은 아니다. 우리 나라 미술계의 선각자이자 대가인 춘곡春谷 고희동이 정환의 소질을 인정했다는 사실이 아닌가.

[viii] (原文)

정환의 손재주는 특출했던 것 같다.

이 화가가 정환에게 환등기를 선물로 주었다. 그 기계에 그림엽서나 어떤 그림이라도 갖다대면 선명한 천연색 그림이 벽이나 휘장에 또렷하게 비치는 것이다. 당시로서는 마술같은 기계였으리라. 자료를 찾아보니 환등기는 그 당시 일본에서 대유행한 교육기재이자 장난감이었다. 소형환등기 50 전, 그림판 한 장에 2 전부터 5 전, 그러니까 1 원 정도면 기계와 그림판 두 타스 정도는 살 수 있었다. (1975 金田茂郎 < 子どもの文化史 > 참조)

그렇다 치더라도 1 원씩이나 하는 선물은 대단한 것이었다. 정환은 환등기에 비추인 그림을 설명하느라 변사 노릇을 했다. 타고

난 말재주에 아이들뿐만 아니라 어른들도 넋을 잃었다. 대고모 집의 넓은 마루와 마당까지 들이찬 구경꾼들이 그 집 장독을 깨뜨린 적도 있었다.　그의 말재주는 단연코 으뜸가는 특성이다. 한국 제일의 구연 동화가로 성장하는 조짐은 이미 어려서부터 나타났던 것이다. 방정환을 아는 사람들이 이구동성으로 감탄하는 것이 바로 동화 이야기의 천재적인 소질이다. 그는 타고난 이야기꾼이었다.

소년입지회, 환등기 이야기는 대부분의 어린이용 전기에 재미있게 재구성되어 실려 있다. 그의 재치있고 익살스럽고 장난기 어린 사건들이 읽는 사람들을 즐겁게 해 준다.

그러나 될성부른 나무는 떡잎부터 다르다고 하는데 우리가 놀라야 할 떡잎의 특성은 어린 정환의 재능이 아니라 그의 의지력이라고 해야 할 것이다. 여러 에피소드는 재미있고 신나게 그려지지만 실상 그 시절의 정환은 몹시 배고프고 힘들었다. 도시락이 없어 점심시간이면 변소 뒤에 숨어 있었던 소년이며 추위에 발을 동동 구르며 물을 긷던 소년이다. 그러함에도 그는 밝고 명랑하게 역경을 전향적으로 뚫어간 용기있는 소년이었다.

ix (原文)

선린상업학교를 그만 둔 정환은 집에서 놀 수도 없고 마땅한 일자리가 있었던 것도 아니다. 1915 년, 그가 만으로는 열 다섯 살의 나이로 얻은 첫 일자리는 조선총독부 토지조사국에서 장부를 베끼는 사자생寫字生이었다. 하루종일 글씨를 쓴 대가는 20 전, 노는 날 빼면 한 달에 5 원이 될까말까하는 수입이었다.

토지조사국이 무엇을 하는 곳인가. 한일합방 이후 조선총독부가 전국의 토지를 측량하고 소유주를 밝히고 현대적인 토지제도를 편다는 구실로 대대적인 조사작업을 시작한다. 본격적인 수탈의 시작이었다. 1912 년부터 1918 년까지 계속된 이 조사에서 우리 나라 농민들은 조상 대대로 이어오던 농사의 터전을 대부분 잃었다. 신고를 하지 않는 토지는 가차없이 국가 소유로 박탈하였다. 민전民田이라고 하여 가문이나 부락에서 공동으로 소유한 토지는 애당초 소유자가 애매할 뿐더러 새로운 신고 절차도 생소하였다. 또한 총독부에 대한 반항의식도 갖게 되어 대부분의 농가에서 신고는 잘 진행되지 않았다. 그 결과 소유주가 변경되었다는 통지서 한 장으로 농민들은 쫓겨나게 된 것이다. 1930 년의 통계로는 전국의 전답과 임야를 합해서 국토의 40% 가 국가소유로 전환되어 버렸다. 이리하여 힘없고 불쌍한 농민들만 봇짐 지고 북간도로 혹은 일본의 노동시장으로 줄줄이 떠나게 된다.

당시 토지조사국은 작업을 서두르기 위해 광화문과 정동에 큰 사무실을 마련하고 1 만명 이상의 임시서기를 채용했었다. 정환이 일한 곳이 바로 여기다. 하루종일 토지대장을 기록하는 일이었다. 본의는 아니고 그 때는 내막을 잘 알지 못했었다 하더라도 일본의 수탈을 거든 셈이다. 짓궂고 얄궂은 운명이었다.

x (原文)

정환은 돈이 필요했다. 그는 배고프고 목말랐다. 그러나 언제나 그가 갈증을 느낀 것은 오히려 정신적인 목마름이다. 책 살 돈이 아쉬웠다.

20 전이란 싼 일급을 아끼느라 정환은 비지떡이나 호떡 하나로 끼니를 때웠다. 그나마 거르고 굶다시피 하면서 읽을거리를 구하고 정신없이 빠져들었다.

그가 즐겨 찾은 책들은 육당 최남선六堂 崔南善의 신문관新文館에서 펴내는 것들이었다. ＜붉은 저고리＞ (1913. 1−1913. 7 통권 7 호) , ＜아이들 보이＞ (1913. 9−1914. 8 통권 12 호) , ＜새별＞ (1913. 9−1915. 1 통권 16 권) 등 신문관의 잡지는 잇달아 강제 폐간을 당하고 1914 년 10 월에는 ＜청춘＞이 발간되었다. ＜청춘＞창간호는 당시로는 파격적이라고 할 수 있는 국판

300 면에 달했고 이후 통상 150 면에 이르렀던 초대형 월간 종합잡지이다. 정환은 < 청춘 > 의 애독자였고 투고자이기도 하다.

xi (原文)

그의 아버지 경수가 입교한 것은 1907 년 말경이다. 가업이 망하고 집안이 박살이 난 직후이다. 그의 나이 스물여덟 살, 위로 아래로 보살펴야 할 대가족의 생계는 막막할 뿐 오죽이나 황당하고 답답하였을까. 그가 처음에 교회의 문을 두드린 곳은 시천교였다. 시천교는 동학의 내분이 자아낸 분파이다. 사정은 다음과 같다.

손병희는 1901 년부터 1906 년 초까지 동학에 대한 체포령을 피하고 해외의 문물을 살피기 위해 이상헌李祥憲이라는 가명으로 일본에 망명하고 있었다. 애당초 미국으로 가려다가 여의치 않아서 일본에 머물게 된 것이다. 국내의 동학인들과는 비밀리에 연결되어 있었다. 당시 국내의 총책은 이용구李容九이다. 손병희의 지시에 따라 이용구는 동학을 진보회라는 이름으로 바꾸어 그 교세를 확장하고 있었다.

때마침 러일전쟁 발발 전후인 한국의 정세는 불안했고 친일세력이 활개를 치기 시작했다. 일본의 정치자금으로 일본인 고문까지 둔 송병준宋秉畯이 이끄는 일진회가 그것이다. 유신회로 시작하여 일진회로 이름을 바꾼 송병준의 조직기반은 실상 수도권 일부에 머무는 빈약한 허울뿐인 단체였다. 그는 이용구에게 접근하여 당신이 이끄는 진보회는 조만간 동학이라는 실체가 밝혀지고 지목을 받을 우려가 있으며 그렇게 되면 활동이 어려울 뿐만 아니라 당신의 신변도 안전하지 못할 것이라는 꼬임수로 그와 결탁해서 1904 년 10 월에 진보회를 일진회에 흡수통합시켜 버렸다. 진보회의 전국적인 막강한 조직과 일진회의 일본의 비호가 합쳐서 생긴 새로운 일진회는 철두철미한 친일조직이 된다. 이 때부터 이용구는 손병희를 뒷전으로 밀어 버리고 회무를 마음대로 조종하였다. 그리하여 드디어 한일 보호조약의 지지성명을 내는 등 일본의 앞잡이 노릇을 서슴지 않았던 것이다.

이용구의 배신과 친일행위에 격분한 손병희는 일본에서 귀국하기 직전 일간지에 동학을 천도교로 개칭하여 선포하였다. 1905 년 12 월 1 일이었다. 이어 1906 년 1 월 25 일에 돌아온 손병희는 이용구에게 생각을 돌리도록 종용했으나 이미 마음이 떠난 그는 막무가내였다. 손병희의 귀국과 때를 같이하여 2 월에는 통감부가 설치되었으므로 친일파로 변신한 이용구는 의기양양할 뿐이었다. 1906 년 9 월 손병희는 고심 끝에 이용구 등 62 명을 출교 처분하여 제명하기에 이른다. 이용구 일당은 그 동안 맡고 있던 진보회의 재산을 몽땅 가지고 나가 그 해 12 월에 시천교侍天教라는 교단을 창교한 것이다.

정환의 아버지 경수가 왜 시천교로 갔는지는 알 수 없다. 다만 그 곳에서 권병덕權秉悳을 만난 것이다. 권병덕은 1868 년 생이며 경수보다 열한 살 연장자로서 경수가 많이 의지하고 따랐던 것 같다.

xii (原文)

갑오년의 동학혁명은 남접의 전봉준과 북접의 손병희가 총지휘를 하였다. 이 때 북접의 주도인물로 권병덕은 김연국과 함께 충청도 보은에서 기포起包하여 전투에 임하였으니 그 두 사람은 생사를 함께 한 끈끈한 인연으로 맺어진 사이였다.

일본에서 급히 귀국한 손병희는 천도교라는 새로운 종교단체의 출범에 즈음하여 대도주직을 김연국金演國에게 이양하였다. 본시 김연국은 손병희와 함께 제 2 세 교조 해월의 수제자로 동학을 이끌어온 중진이다. 그러나 자신이 손병희보다 연장자이고 입도 경력도 오래된데도 불구하고 손병희의 지도력과 포용력에 늘 밀려온 터였다. 일진회의 이용구는 김연국의 그러한 불만스러운 속내를 잘 알고 있었으므로 그에게 시천교의 고위직 대

종사大宗師로 모시겠다고 그를 천도교에서 시천교로 전신하게 만들었다. 이 때 권병덕도 김연국과 함께 시천교로 간 듯하다.

xiii (原文)

손병희가 방정환의 눈을 보고 사위로 삼았다는 이야기는 어린이용 전기에도 쓰여 있다. 눈은 마음의 창이라고도 하지만 방정환의 어떤 면이 마음에 들었을까. 손병희를 흔히 웅체호상熊體虎相이라고 표현한다. 곰처럼 우람한 체구에 얼굴은 호랑이 상이라는 말이다. 그의 눈빛은 상대를 압도하는 위력이 있었다는데 그런 호랑이 눈빛을 마주 받아친 정환의 눈빛도 범상하지 않았던 것으로 보인다. 분명 그의 미래를 감지하게 하는 예사롭지 않은 무엇을 비치고 있었으리라.

xiv (原文)

현재의 나이 계산으로는 17 살과 15 살이다. 당시로서는 보통이겠지만 이른 결혼이었다. 교조의 생일을 겸하여 결혼식은 성대하게 치러졌다. 끼니를 거르던 정환은 이제 의식주에 아무 걱정이 없어졌다. 남자판 신데렐라와 같은 운명이었다고 할까.

결혼 후 손병희와 홍씨 부인 및 그 딸들과 함께 가회동의 넓은 처갓집에서 살게 되었다. 홍씨 부인은 사위의 몸보신에 정성을 쏟았다. 하지만 어머니의 극성에 언제나 다소곳하고 얌전한 용화는 모처럼의 아내 역할을 빼앗겨 모녀간의 갈등이 일기도 하였다. 당사자인 정환은 좋은 음식과 보약을 먹어서 날로 몸이 비대해졌다. 후세의 사람들이 알고 있는 뚱뚱한 이미지는 이 때부터 만들어진 것이다.

xv (原文)

정환의 큰아들 운용은 어머니와 이모들에게 들은 에피소드를 많이 기억하고 있다. 신혼초기를 회고하면서 용화가 말하는 남편의 몸은 뼈마디 소리가 달그락거릴 정도로 말랐었다고 한다. 가끔 용화는 결혼 직후엔 해골하고 사는 것 같았다고 웃었다. 차츰 살이 오르면서 인물이 훤해졌는데 특히 그의 손은 여자 손만큼 곱고 아름다웠다고 한다.

다정다감하고 붙임성 있는 정환은 가족들에게 대인기였다. 용화 아래 두 처제들은 형부라고 부르지 않고 '새 오빠'라면서 따랐다. 그림도 그려 주고 옛날 이야기도 해 주었다. 하루는 생선을 익혀서 뼈와 가시는 원형대로 두면서 핀셋으로 살을 발라내어 물고기 해부 모형을 만들어 주었다. 그 솜씨가 어찌나 좋은지 표본액자에 넣어서 벽에 걸어두었다고 한다. 정환의 손재주는 역시 예사롭지 않았던 것 같다.

또한 음식 만드는 것을 즐겼고 솜씨도 좋아서 탕수육을 잘 만들고 이웃 아이들에게 나누어 먹이기를 좋아했다. 선물 고르는 센스가 뛰어나 받는 사람을 실망시키는 일은 결코 없었다고 한다.

xvi (原文)

손병희와 한 지붕 밑에 살게 된 정환은 장인의 기대에 부응하려고 마음다짐을 했을 것이다. 장인의 배려로 보성전문학교에서 공부도 하게 되었다. < 청춘 >, < 유심 >, < 천도교회월보 >, < 신청년 > 에 투고할 글도 부지런히 썼고 무엇보다 천도교에 대한 공부를 열심히 했다. 정환에게 손병희는 장인이라기보다 종교인으로서 사회지도자로서 항상 높은 자리에 우러러 보이는 큰 존재였다. 그는 아버님이나 장인어른이라 하지 않고 언제나 우리선생님이라고 불렀다.

xvii (原文)

그가 망명 중에 본 일본의 근대화는 눈부셨고 우물안 개구리와 같은 우리의 후진성을 인정하지 않을 수 없었다.

일본은 명치유신 직후 서구식 학교교육제도를 실시하여 1890 년에는 소학교 4 년을 의무교육화한 터이다. 손병희가 그 곳에 머물던 시기에 이미 취학율은 92 퍼센트였다. 1907 년부터 소학교 6 년간의 무상 의무교육을 실시하니 취학율은 97.38 퍼센트로 향상된다. 문맹이 없으니 출판사업이 왕성하고 세계문물의 정보전달이 신속할 수밖에 없다.

일본의 근대화는 학교교육의 진흥이 뒷받침한 것을 손병희는 똑똑히 보았고 실감할 수 있었다.

xviii (原文)

귀국 직후 1906 년 3 월에 사립 보성학교 교장 김중환에게 80 원의 지원금을 전달하였다. 이를 필두로 연이어 재정난에 허덕이는 사립학교 23 개교에 학교 규모나 재정의 형편에 따라 20 원에서 80 원을 기부하였다. 교육구국주의 정신으로 사립학교가 왕성하게 설립되던 때이다. 그러나 거의 모든 학교의 재정은 취약하기 짝이 없었다. 손병희는 계속해서 폐쇄 위기에 놓인 학교에 보조금을 아끼지 않고 전달하고자 했다.

그러나 그 해 천도교에서 출교 당한 일진회의 이용구 일파가 그 동안 관리하던 교회의 재산을 내어놓지 않았기 때문에 천도교 자체가 재정난에 부딪히게 되고 말았다. 따라서 사립학교 지원사업은 일시 중단할 수밖에 없었다.

천도교가 조직과 재정면에서 자리를 잡고 숙원이던 학교교육의 진흥에 참여할 수 있게 된 것은 한일합방이 되고 난 1910 년 이후이다.

손병희의 교육사업 업적 가운데 가장 두드러진 것은 보성학원과 동덕학원의 육성이다. 당시 보성학원은 폐교직전이었다. 설립자 이용익은 학교설립 후 블라디보스톡으로 떠나고 1907 년에 그 곳에서 54 세를 일기로 병사하였다고 전해지고 있으나 진단학회가 펴낸 ＜한국사＞에는 1907 년 1 월에 암살되었다고 기록되어 있다. 그의 손자 이종호가 교주校主로 있었으나 당시 19 세의 약관이었으니 늘어나는 부채를 감당할 수 없고 그도 일본당국의 감시를 받는 처지라 블라디보스톡으로 피신하게 된다. 교주 없는 보성학원의 직무대리를 하던 윤익선尹益善으로부터 전후사정 이야기를 들은 손병희는 천도교에서 인수하기로 합의를 보게 된 것이다.

1910 년 12 월 21 일 천도교의 당시 대도주 박인호의 명의로 8,000 원의 채무청산비를 수교하고 학교경영을 인수하되 3 년 안에 구 교주가 귀국하여 권리반환을 요구할 때는 실비반환으로 돌려 주고 3 년이 경과할 때에는 모든 권리는 천도교에 귀속된다는 내용이었다.

소학교, 중학교, 전문학교까지 갖춘 사립학교를 인수 운영하게 된 천도교는 의욕적으로 학교발전에 나서게 된다. 전문학교 교장에 윤익선, 중학교 교장에는 천도교에 갓 입교했으나 후에 중진이 된 최린崔麟이 취임하였다. 그러나 천도교라는 특정 종교단체가 운영하는데 따른 학생과 학부형의 불안은 집단으로 자퇴원을 내는 등 천도교에 대한 거부반응을 야기하기에 이른다. 애당초 종교적 색채는 강요하지 않는다는 약속이었으나 천도교회의 입장에서는 학교운영에 교회가 전혀 간여할 수 없다면 학교경영을 포기하겠다는 교회간부의 강경한 태도도 만만치 않아 한동안 갈등이 계속되었다. 이 문제는 상호간의 이해로 수습이 되고 학생수도 날로 증가하였다.

박동（현재 수송동）에 있던 구 로어학교 교사에서 시작한 보성학원은 증축을 거듭했으나 낮에는 소학교와 중학교가 사용하고 밤에는 전문학교가 써야만 하는 협소한 것이었다. 1914 년에 이르러 구 교사를 헐고 양옥 2 층 교사를 신축하여 2 부제로 사용하던 시설 문제도 해결하였다. 보성학원은 천도교에서 인수 운영한 후로 조선총독부의 학제에 관한 간섭으로 그간에 어려운 문제들도 있었다. 즉, 전문학교의 명칭을 못쓰게 하여 1915 년에는 사립보성법률상업학교로 부르지 않을 수 없게 되었다. 그러나 실질적으로는 법과와 상과（경제학과를 개편）를 두어 발전 일로에 있었다. 1918 년에는 낙원동에 임차계약이지만 신 교사를 마련하여 전문학교의 전용 교사로 사용하게 되었다. 이 때부터 전문학교는 분리 독립을 하게 된 것이다. 전문학교의 명칭을 정식으로 사용하게 된 것은 1922 년 새로운 재단이 출범한 이후이다.

그런데 뜻하지 않던 일이 생겼다. 전 교주

이종호가 나타나 학교반환을 요구한 것이다. 그는 해외로 도피 중 1917 년에 상해에서 체포되어 귀국하였고 1 년간 고향인 명천에 거주제한을 받다가 1918 년 풀려나면서 보성학원의 반환을 요청하였다. 애초에 3 년 이내에 반환을 요구하면 실비반환을 한다는 약속이었으나 이미 8 년이 지났고 그 동안의 경비는 20 여만원에 이르고 있었다.

윤익선 교장은 곧 의암 손병희에게 알리고 의논하였다. 그는 교육사업은 위공무사爲公無私한 정신으로 시작한 것이니 무변상으로 돌려주는 것이 좋겠다는 의견이었고 천도교 간부들은 손병희의 큰 뜻을 받들어 무조건으로 반환하기로 하였다.

1918 년 10 월 16 일에는 윤익선 교장과 최린 교장의 사표와 함께 모든 사무인계까지 끝났다. 이제 조선총독부의 인가만 남았는데 당국은 이종호에게는 학교를 유지할만한 재단구성 능력이 없다는 이유로 설립자 변경신청을 허락하지 않았다. 이로써 보성학원은 계속하여 천도교가 운영하게 된 것이다.

이런 와중에 방정환은 1917 년 결혼 직후 보성전문학교 법과（당시의 사립보성법률상업학교）에 입학하게 되었다.

xix (原文)

손병희의 공적 가운데서 학교교육에 쏟은 정성을 빼놓을 수 없다. 1906 년 2 월 16 일, 손병희를 환영하기 위해 독립관에 모인 교도와 일반인에게 연설할 때 민족혼을 고취하고 독립정신을 함양시키는 가장 중요한 길에는 두 가지가 있다고 힘주어 강조한 바 있다.

“그 하나는 천도교가 동학 창도 이래의 정신을 계승하여 그것을 실현하는 것이요, 또 하나는 학교교육을 진흥시켜 민지民智를 개발하고 기술을 습득하여 민족생활의 토대를 굳건히 함으로써 민족의 역량을 배양하는 데 있습니다.”

그가 지향하는 목표는 종교로서의 천도교 발전과 학교교육의 육성이었다.

xx (原文)

이 밖에도 손병희는 출판사업으로 민지를 향상시키려고 의도한 바 있어 보문관, 보문사, 보성사 등 출판사를 운영하였다. 이 사업에도 우여곡절이 많았지만 3.1 운동 때 독립선언서를 보성사에서 인쇄한 일은 잘 알려진 사실이다. 1906 년 귀국 직후에 ＜만세보＞라는 신문을 발간하여 오세창이 그 책임을 맡아 1 년간 운영하기도 했다. 또한 한일합방 직전에 ＜천도교회월보＞라는 기관지를 창간한 바 있다. 손병희는 출판사업의 중요성을 알고 있던 사람이다.

가회동의 장인 집에 살게 되면서 정환이 확실히 느끼고 본 것은 장인이 교육사업에 쏟아 붓는 열정이었다. 자라나는 세대에 희망을 걸고 물질로 정신으로 전력 투자하는 장인의 큰 뜻에 깊은 감명을 받았고 동시에 뜨거운 존경을 금할 수 없었다. 교육은 미래를 약속하고 미래는 지금 자라나는 어린 사람의 몫이란 확신이 정환의 가슴에 뿌리내리고 있었다.

xxi (原文)

정환이 계대교인으로 손병희의 사위가 된 후 그에게 무엇보다 시급하고 절실한 것은 명실공히 올바른 천도교인이 되어야 하는 문제였다. 아버지가 천도교인이라고 해서 절로 교인이 되는 것은 아니며, 장인이 교조라고 해서 절로 교인이 되는 것은 더더욱 아니라는 점을 누구보다 정환은 깊이 자각하고 있었다. 또한 신앙은 각자의 몫이라는 것도 잘 알고 있었다. 그의 양심과 양식은 천도교인으로서의 정진에 노력할 것을 재촉하고 있었다. 그러기에 평소 아내 용화에게 “다시 태어날 수 있다면 천도교를 좀 더 철저하게 공부하고 더 깊이 믿고 싶소.” 라고 되뇌인 말은 자신의 수도생활에 대한 자성의 소리였는지도 모른다.

xxii 『朝鮮文壇』第 6 号、1924 年、方定煥「消えない記憶」

xxiii (原文)

천도교의 교리공부는 ＜동경대전＞과 ＜용

담유사龍潭遺詞 > 를 읽는 것이 기본이다. < 동경대전 > 은 순 한문으로 되어 있는데 한자 자체가 표의문자이기 때문에 문자 하나 하나에 담긴 그 심오한 뜻은 주석 없이 이해하기 어렵다. < 용담유사 > 는 한글로 된 가사체이지만 만고유전萬古遺傳의 고사古事와 경사經史가 많아서 이 역시 그냥 읽고 이해하기는 어렵다. 정환은 누군가 교회의 원로 선생에게 개인지도를 받으면서 경전공부를 했을 가능성이 크다.

xxiv 『東經大全』の内容は次の通り。

布德文、論學文、修德文、不然其然、祝文、呪文、詩文、立春詩、絶句、降詩、座箴、和訣詩、歎道儒心急、八節、筆法、詩文、訣、偶吟、前八節、後八節、題書、詠宵、筆法、流高吟、偶吟、其他詩文、通諭文、儀式、跋文、通文、通諭、儀式、跋文

『龍潭遺詞』の内容は次の通り。

教訓歌、安心歌、龍潭歌、夢中老少問答歌、道修詞、勸學歌、道德歌、興比歌、劍訣、水雲・崔濟愚先生年譜

xxv (原文)

천도교의 신앙대상은 한울님이다. 동학의 창도자 최수운은 ‘시천주侍天主’를 내세우고 사람마다 마음 속에 한울님을 모신다고 설파하였다. 제 2 세 교조 최해월은 ‘사인여천事人如天’이라 하여 사람 섬기기를 한울님과 같이 하라고 포교하였다. 손병희는 ‘인내천人乃天’이라 하여 신인합일神人合一, 즉 사람이 곧 한울님이라는 개념으로 천도교의 진수를 규정하였다. 강조한 표현이 조금씩 달라지고 있으나 한울님을 섬기는 ‘시천주’신앙의 근본은 한결같다.